

発表サマリー

「タジキスタン内戦：和平へのプロセスにおける国内アクター・外部アクター間関係の影響」

齋藤竜太（ロシア NIS 貿易会ロシア NIS 研究所研究員）

報告概要： 1992年から1997年にかけて起こったタジキスタン内戦が和平へと至った背景および和平の結果としての権力配分の結果について、内外のアクター同士の関係性——特にパワーバランスや影響力の差といった視点から——考察を試みた。この考察の過程では、地域をめぐる国際情勢の変化も影響要因として指摘した。タジキスタン内戦に関する事例研究では、外部アクターの仲介や紛争当事者の内部の権力闘争などについて取り組むものが多かったが、本報告では外部アクターの動向と内部アクター間の関係性を接続させることにより、和平合意のプロセスおよび結果について説明を試みた。

報告および質疑応答で、特に内戦の構造面から指摘したのは以下の点である。

- 当初タジキスタン内戦の、旧共産党政権の流れをくむ「体制派」はアクターとしての一体度は必ずしも高くはなかった。
- 体制派のパトロンであったロシア側は、旧ソ連崩壊当初は中央アジアからは「退く」ベクトルにあり、対タジキスタン関与も一本化されていなかった。
- その後、「体制派」内部では現大統領のラフモノフ（現ラフモン）およびその地盤であるクロボ閥に権力が集中し、ほかの有力者や地域閥が退くまたは後景に退くことにより、「体制派」内部のアクターとしての一体度が高まった。
- しかしタジキスタンと隣接するアフガニスタンにおいて情勢が悪化したことにより、地域内外のアクターでタジク内戦を和平妥結へと至らせる強いモメンタムが起こった。
- 和平の過程では、「体制派」のパトロンであったロシアの影響力がほかの外部アクターと比較して圧倒的であったことから、「体制派」に有利となる和平の様態となった。

質疑応答： 本報告に対しては、オーディエンスおよび討論者より以下のような問いが出された。まず、本報告の学術的な位置づけについて問われ、特にこれが紛争研究または事例研究いずれの文脈で新規性を持つのかについて質された。これについては前述の通り後者において意義を有するものである旨説明を行った。またタジキスタンの内戦後の国家建設についての質問もあり、これにたいし報告者からは、和平合意の精神とは異なり、「体制派」のメインアクターとなったラフモノフおよびクロボ閥が中心となった権威主義体制が強固となる現状について説明し、この結果に対しては和平のプロセスにおける内外アクター間のパワーバランスが影響した可能性について指摘した。討論者からはロシアを「第三者」としてみなすことの妥当性、「反体制派」とイランとの関係性について質問があり、報告者からは旧ソ連崩壊当初の状況について指摘しつつロシアが「第三者」でないとする見方には議論の余地があること、「反体制派」とイランの関係は、むしろ「反体制派」がイランを頼るというベクトルの向きを示していた可能性について見解を述べた。